視察旅行における観光のまなざし
――島根県隠岐郡海士町への視察訪問をめぐる社会的相互作用と権力関係の考察――

長友　　淳*

Tourist Gaze in Visitation and Business Tours : Social Interactions and Power Relations between Host and Guest in Ama-cho, Oki Islands, Japan

Jun NAGATOMO

要旨：本稿は、島根県隠岐郡海士町への視察訪問におけるホストとゲストの社会的相互作用と権力関係について文化人類学的視点から考察を行う。人口約 2,400 人の離島の海士町は、財政危機や少子高齢化を伴った人口減少に苦しんできたが、2002 年に就任した山内町長のもとで多岐に渡る財政削減、水産加工施設などへの投資、教育魅力化プロジェクトなどの改革に成功している。その成果は全国的な注目を集め、政治家や自治体関係者、教育関係者など、現在年間 2,500 人もの視察を受け入れるまでになっている。以上の点を踏まえ本稿は、視察訪問における「まなざし」の特性やゲストとホストあるいは中央と地方の権力関係をめぐる社会的相互作用について考察する。

Abstract :

This paper explores social interaction between host and guest in visitation/business tours to Ama-cho in Oki Islands, Japan. Ama-cho is a remote island with a population of about 2,400 in Western Japan. Until the beginning of the 2000s, the island had suffered from financial crisis and population decrease with declining birthrate and a growing proportion of elderly people. However, under the leadership of Mayor Yamanouchi since 2002, the town has been conducting radical reform, through cost reduction in various sectors, investment on processed marine products factories, and educational reform to prevent children and their families from leaving the island and also attract new students from outside the town. The success of the reform has gained media attention, and currently more than 200 groups per year, including politicians, government officials, teachers and researchers visit the island to observe the reforms and learn from the key individuals responsible for the change. In consideration of these situations, this anthropological paper studies characteristics of “tourist gaze” on the island, and the interpretation of power relations between host and guest.

キーワード：観光のまなざし、真正性、権力関係、省察性、エージェンシー性

---

*関西学院大学国際学部准教授

1. はじめに

島根県の離島である隠岐郡海士町（中ノ島）は、人口流出、少子高齢化、財政破綻などの危機から大幅に改善し、地方創生の成功事例として近年メディアで全国的な注目を集めている。海士町の成功は、2002 年の就任以来、改革を先導した山内町長自身が「守りの改革」と「攻めの改革」と呼ぶ大胆な施策によるところが大きい。「守りの改革」は、人件費削減と公共事業依存からの脱却を中心に行われた。特に人件費は、職員の給与カット（町長は半額、職員は 16〜30％ 減）、職員の早期退職・転職支援、収入役廃止、町長公用車廃止、旅費規程見直し、時間外手当縮減、宿日直の外部委託廃止などにより、平成 17 年には平成 10 年と比較して 2 億円、率にして 45％ もの削減に成功した（山内 2007 : 82-88）。一方、「攻めの改革」は、「島まるごとブランド化」構想を軸とした産業創出が中心にすえられ、選択と集中を伴う大胆な投資による雇用創出や「島外貨獲得」が推進された。水産物に付加価値や雇用および漁獲期を問わず通年の利益を生み出す新世代凍結技術の CAS 施設に町財政としては破格の合計 5 億円を平成 16〜17 年度に投資した（山内 2007 : 109）。第三セクター事業として、海水精塩施設「海士御塩司処」の建設、サザエカレー、岩ガキ、干しナマコ事業などが順調に進められるとともに、民間企業も隠岐牛ブランドの確立に成功した。

上記に加え、注目を集める海士町の地域復興策として「U/I ターン[1]の誘致・支援」や「教育魅力化プロジェクト」が挙げられる。少子高齢化に伴い、1940 年代に約 7,000 人だった人口は 2000 年代には約 2,500 人にまで減少していたが、結婚祝い金（1 件 10 万円）や出産祝い金（子供の数に応じて最大 100 万円）のみならず、I ターン者むけの住宅整備や保育奨励金や本土での出産の際の交通費補助、商品開発研修生や農業研修生の制度などを通じて U/I ターン移住者の受入れに成功し、2004 年からの 7 年間で 361 人ものＩターン者の受入れを行った（阿部 2013 ; Nagatomo 2013 : 6）。I ターン者の定着率は約 6 割で推移し、島の人口の 1 割強を占めるまでになっている[2]。また、「教育魅力化プロジェクト」では、高校進学を機に本土に世帯ごと転出する悪循環を断ち切るために、島内唯一の公立高校である島前高校の魅力化および島外生徒の受入れ、町営塾「隠岐國学習センター」の運営を実施した。高校魅力化では、地元の住民も協力する「地域学」などのカリキュラムの独自化や、グローバルとローカルの双方を重視するグローカルな教育計画によって文部科学省スーパーグローバルハイスクールに選定されるなど、着実な成果を上げた。1997 年からの 10 年間で生徒数が 3 分の 1 になり、2008 年入学者が 28 人にまで減少し廃校の危機にあった島前高校は、2013 年には新入生数 45 名（生徒 23 人、島外生徒 22 人）になり、特に県外からの倍率は上がり続け約 2 倍で推移している[3]。

海士町の取組みは、2010 年代の地方創生施策の成功例として全国的な注目を集めるようになり、海士町への視察旅行は増加の一途をたどり、年間約 2,500 人が視察に訪れるようになった[4]。この数値は、人口規模約 2,400 人の離島としては異例の数と言えよう。また企業研修も島で起業した株式会社巡りの輪などを中心として実施されるようになっている。マスツーリズム型の観光ではなく、ユネスコのジオパークにも登録された隠岐諸島の自然を生かした観光を推進しているとはいえ、視察旅行の受入れは海士町の産業の一つとも言える。

これらの点を踏まえ、本稿は観光社会学・人類

1）U ターンが出身地に戻る移動を示す概念であるのに対して、I ターンは出身地ではない地方部への移動を指す。なお近年では、出身地に近い場所への移動（U の字の少し手前という意味で）J ターンという言葉も生まれている。

2）筆者フィールドワークに基づく。2013 年 5 月、2015 年 9 月、2016 年 11 月の役場職員への聞取り調査。

3）筆者フィールドワークに基づく。2013 年 5 月、2015 年 9 月、2016 年 11 月の海士町役場教育魅力化コーディネーターへの聞取り調査。なお島根県では 1 学年 21 人未満になれば廃校という基準がある。

4）筆者フィールドワークに基づく。2017 年 11 月海士町観光協会。

学的視点から以下の点を考察する。第一に、視察旅行という通常の観光とは異なる滞在形態における「まなざし」とはどのようなものか。J. アーリが観光のまなざしには記号が含まれると論じる文脈において、海士町への視察者の記号とはいかなるものが含まれるのか。第二に、ホストとゲストのコンタクト・ゾーンとして視察旅行の「場」をとらえる際に、その「場所性」はホスト・ゲスト双方においてどのような意味付けが行われ、両者の権力関係においていかなる社会的相互作用が見られるのか。第三に、これらの点は、観光社会学や観光人類学的視点からどのような解釈が可能か。本稿は、以上の問題設定に基づいたフィールドワーク（2010 年から 2016 年にかけて計 6 回実施。半構造化インタビューを 25 人に実施）をもとに論じる。

2. 海士町における視察旅行の「場」：地方創生の聖地としての舞台性

海士町は地方創生の成功事例として注目され、「巡礼」の地としての舞台性が見られる。玄関口である港の空間はその典型であり、この島が自然豊かな離島であるだけでなく、日本で最前線の改革の島に入ったことを訪問者に感じさせる舞台装置でもある。本土側の境港あるいは七類港までの長距離移動、およびその後の船旅を通して離島の地理的隔絶を感じた訪問者にとって、その場の異質性は際立って感じる。地元の祭りの名前からキンニャモニャセンターと命名されたターミナルビルは、改革の本丸である海士町役場が典型的な地方役場の建物であるのに対して、木材の質感を生かした新旧デザインが融合した建物である。建物内には、「ないものは、ない」のポスターが張られている。「なくてもよい」という意味と「大切なものは全てある」、という二つの意味をかけたロゴであり、半年以上役場の若手職員を中心として検討を重ね、デザイナーの梅原誠氏にデザインを依頼して町役場地産地商課によって製作された。このロゴは役場職員の名刺やポロシャツにも入れられている。2 階のフェリーの乗降場横ロビーには、「島まるごと図書館構想」によって実現した本の貸し借りコーナーが設置されている。ビル内には、地元海産物や食品・みやげ店、レストラン、隠岐汽船事務所が構えているほか、「島じゃ常識さざえカレー」などを生み出してきた役場の産業創出課が設置されている。また、訪問客の動線を巧みに考慮した形で、地上階に降りた箇所には観光協会カウンターが設置され、年中無休で訪問客のニーズにワンストップ・サービスで対応している。その事務所に勤めるのは、みな接客センスに満ちた若者であり、2013 年 10 月のフィールドワーク時点ではスリランカ人 1 名を含み全員 I ターン移住者であった。訪問客にとって、「離島」の玄関口のこのような形の接客と若者の活気は、滞在中に見る改革の取組みの視察のプロローグとなる。

また、高校魅力化と町営塾の取組みに見られる「教育を中心とした地方創生」は、視察内容の中心となっており、町営塾「隠岐國学習センター」は新旧が融合した独特の空間となっている。町営塾は、島前高校の丘から港側に降りた場所に位置している。フィールドワークを開始した 2010 年当時は空き家を利用して運営されていたが、2015

写真 1　海士町の取組みに関する新聞や雑誌記事

写真 2　キンニャモニャセンター外観

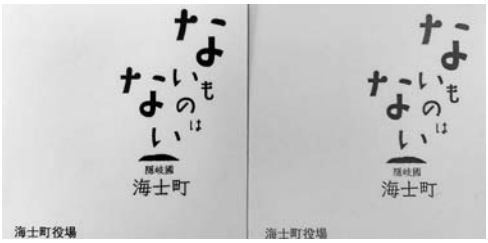

写真 3 「ないものは、ない」のロゴが入った名刺

年に近郊に移転した。その際に、古民家を解体して新築する予定が検討されたが、解体ではなく大幅なリフォームで対応した。予算申請や計画に関わった同センター長（海士町役場教育魅力化プロジェクトリーダーを兼任）は、島内で議論を重ねる中で「いわゆるハコ物を作るような従来のやり方とは違って、あるもののを活かして伸ばしていくという声が強くて、それを形にすることを目指した」と述べていた。改築された隠岐國学習センターは和モダンのデザインで改修され、地域交流スペースとして地元住民が入れる場としての土間空間、新旧融合を象徴する梁や柱の露出および間接照明での演出など、あらゆる記号がその空間には存在する。大教室には大手通信社のテレビコマーシャル（遠隔地の学校教室を 3 面スクリーンに映してのバーチャル授業風景）にも使用された最新の ICT 技術が導入されている。そこでは「夢ゼミ」と呼ばれる、高校生の興味関心の探求とキャリアデザインを支援する取組みが行われ、ICT を活用した専門家との対話も頻繁に実施されている。また、スタッフの大半は大手教育産業や一流進学塾での勤務経験を持つ I ターン者である。

以上のような視察の「場」は、訪問者にとっては「異質性」を感じる場となっている。「異質性」の議論に関して、山中（2014 : 9-10）は、聖地が「開かれた消費空間」に移行しつつあると指摘する中で、聖地の表象において「異」性や「他」性が「聖地のマーカー」となり、異質性こそが現代の消費の対象となり、メディアがそのマーカーの重要な担い手となっていると述べる。この文脈において、海士町で視察者が目にするのは、いずれも「異」性や「他」性に満ちたものであり、様々な空間に、その記号は存在する。「離島の港」であるキンニャモニャセンターが明るく開放的でモダンな空間で、そこで出会うスタッフは皆、都会的な接客センスを持つ若者であり、改革の記号である「ないものは、ない」のポスターが多く貼られている。「町営の塾」である隠岐國学習センターは新旧融合したモダン・ジャパニーズデザインで演出され、ICT が活用されスタッフは一流講師がそろう。これらは、訪問者にとって自らが訪問前に持っていたイメージを転換させられるものであると同時に、「異」性や「他」性を感じさせるものである。

キンニャモニャセンターや隠岐國学習センターの空間の演出は、いずれも役場や島の将来を考える若者たちの会合など様々な場で検討され、予算申請や計画を経て実現したものであるため、それを観光人類学のホスト－ゲスト論の文脈からまなざしの作用によるものとして結論付けるのは拙速である。海士町側にとっては、自らの取組みが結果としてメディアや行政・教育関係者の注目を集めるようになった「結果的な聖地化」と言えるかもしれない。しかし、その一方で、「ないものは、ない」のロゴを積極的に活用し、視察者は足を運ぶのが「異」性や「他」性を感じさせる場であるのは、D. マキャーネルが述べる「演出された真正性」の議論の中の、舞台裏の議論とも関連する。マキャーネル（2012［1976］）は、マスツーリズム的消費に満ちた有名観光スポットなどの表舞台とは異なり、路地裏などの一見舞台裏に見える空間さえも演出の対象となっている場合があり、その境界が曖昧性と重層性に満ちている点を指摘する。つまり、訪問者にとって、何が演出さ

れたもので何がそうでないかの区別がつきにくい空間が存在するのである。海士町への訪問者にとって、語りを聞く地方創生のキーパーソンと地元住民の温度差は、なかなか見えづらい。実際にフィールドワークにおけるインフォーマルインタビューでは、バスの高齢者無料パスの廃止やゴミ袋有料化について島民側から声が上がった点が言及されていた。しかし、I ターンの若者むけの住宅がある一方で、U ターン者にはその手厚さがないという語りや、地域創生の牽引役と「ふつうの住民」との間に温度差があるという語りも存在した。このような語りが示すのは、改革の島に存在する多様な主体の存在と視察のヒアリングでは浮かびあがることの少ない地元住民の姿である。地方創生の聖地としての海士町は、様々な主体が視察というまなざしのもとに暮らすドラマトゥルギー的な舞台の場でもあると言えよう。

以上のように、離島という地理的隔絶は都会と地方という境界性を際立たせ、地方創生の聖地としての舞台性につながる。その舞台は、まなざしを前提とした視察旅行の場でもあり、その「場」は、舞台の境界の曖昧性と重層性に満ちたホストとゲストのコンタクト・ゾーンとして捉えることができる。

3. 視察旅行をめぐる社会的相互作用と権力関係

3.1. 視察のまなざしと省察性

視察訪問者のまなざしは、マスツーリズムのそれとは大きく異なる。マスツーリズムは、表舞台としての有名観光スポットや観光地のアトラクションが、まなざしの対象となる。また、文化観光や遺産観光の場合は、消費主義的傾向が弱まるものの、街並みや史跡などの風景や神楽や伝統舞踊などの文化遺産が、まなざしの対象となることが多い。しかし、視察旅行のまなざしは、これらのいずれとも異なるものである。以下には、海士町の事例をもとに視察旅行のまなざしをめぐる解釈を行う。

第一に、まなざしの対象が「行為の蓄積」にあり、視察は「語りを聞くこと」を目的とし、視察・滞在が業務として行われることが多い点を指摘することができる。まなざしや観光客の期待をめぐる当該分野の議論では、マスツーリズムの文脈では、事前に得たイメージを現地で再確認するという意味で D. ブーアスティン（2010［1962］）が「擬似イベント」と形容した。ツーリストの消費主義的傾向を指摘するブーアスティンに対して、マキャーネル（2012［1976］）は真正性を求めるツーリストの傾向を認める立場をとり、表舞台・舞台裏の重層性やその文化の真正性について考察した。また、J. アーリ（1995［1990］）は、M. フーコーが『臨床医学の誕生』にて考察した医学的まなざしの視点を援用しながら、観光客のまなざしが、観光客が日常から離れた景色や街並みに対して投げかける一種の期待を込めたまなざしであり、それは力学の作用としては一方向ではなく双方向性[5]を持つ点を指摘する。これらの議論の前提となっているのは、アーリが旅の経験を「日常生活からの逸脱行為」として捉え、まなざしが非観光の時間との「関係性」から生じると指摘するように、「仕事の対極にあるレジャー」としてのツーリズムである。しかし、視察旅行の場合、その度合いは個人によって異なる場合があるにせよ、基本的にそれは「仕事の一環」としてなされる。この点において視察旅行は、アーリが念頭においているような日常生活の逸脱や日常との関係性という二項対立的な時間や経験とは異なるものと捉えられる。

第二に、視察旅行のまなざしの対象は、「風景」というよりはむしろ「語り」そのものに向けられている点で特徴的である。「語り」やそれを通したホスト－ゲスト間の文化交流に着目する視点は、当該分野の先行研究でも考察されてきた。例えば E. コーエン（Cohen 1988 : 377）は、旅行者の形態を「レクレーション・モード」から「実存モード」まで「他者との関わり」を軸にしながら五つに分類した。その中の「経験モード」は他者

5）その具体例としてはゲストのまなざしを前提とした土産物などのミクロな事例から、観光地の景観構築などのマクロなものまで幅広い。

との交流を積極的に行い、その経験を自らの人生に還元させる姿勢を持つものであり、視察旅行の経験とも関連するものである。また、太田（1999）は沖縄のウミンチュ観光を事例にまなざしの対象となる沖縄の漁村の住民が、その文化の語り手となることで生じたミクロなアイデンティティの変化について論じた点も、他者との関わりに着目した研究の事例である。しかし視察旅行の場合、行為の「蓄積」やその「成果」の観察自体を目的としている点で、これらのツーリズムや文化観光のいずれとも性格や文脈が異なるものと言える。

海士町に向けられるまなざしは、一種のサルベージ人類学的まなざしを含むものである。そのまなざしは、常に進歩を求められてきた近代性に取り残された存在へのノスタルジーに満ちた憧憬を含むものでもある。アーリ（1995［1990］：6）は観光のまなざしの特徴に含まれる憧憬と記号の事例として次のように論じている。

> まなざしは記号を通して形作られ、ツーリズムはそうした記号の収集をともなう。たとえばツーリストが、パリでキスする二人を見た時、彼らがまなざしを向けているのは「永遠のロマンチックなパリ」ということになる。

ツーリストが記号の収集を行うと指摘するアーリの文脈において海士町の視察訪問者を捉えると、海士町の視察訪問者のまなざしには、財政危機や少子高齢化という日本の自治体の多くが直面する課題に対して、地方部で都市の発展からは「取り残された離島」が成功した、という語りが含まれる。それは発展する中央と取り残された地方という二項対立的認識と、地方へのノスタルジーを含む憧憬という記号が含まれる。その憧憬は、海士町が新しい生き方を模索するＩターン移住者を積極的に受入れ、島で起業することを支援し、自己実現ができる島としての自己表象を行うという異質性を逆に際立たせるものともなる。また、「そこにあるもの」を商品化して都市圏に売るという地産地商課や産業創出課の取組みや、高校魅力化において地元住民が協力する「地域学」や「島親制度[6)]」は、近代性の中で都市が喪失したゲマインシャフトへの憧憬を記号の意味内容に含むものでもある。

第三に、視察旅行は省察性（ラッシュ 1991）を得ることを前提とし、それはそれを文字化した報告書という形で帰結する特異な性格を持つ。省察性をめぐっては、ラッシュ（1991）が Reflexive modernisation という用語で、近代化の過程において主体が自らの社会的状況を省察する力が増幅している点を示した。アーリ（2004［1995］：238）は、『場所を消費する』の中で次のように述べる。

> （省察性は）…審美的なものでもあるのだ。これには、イメージやシンボルの増殖が関係しており、感覚のレベルで作用して、種々の自然や社会についての趣味や品格的区別立てをめぐって統合されている。…（中略）…現在見られる歴史への思い入れ（「文化遺産産業」）は、単なる歴史の資本主義的商品化の産物ではなく、再帰的近代化の一要素なのである。

このようにアーリは、文化遺産産業に言及しながら、審美的省察性の対象が従来のマスツーリズムの消費主義的なまなざしとは異なると論じる。アーリにとって省察性とは、多様な社会や文化における経験をもとに自らの立ち位置を判断し移動するコスモポリタニズム的主体とそのモビリティを念頭に置かれたものであり、現代において労働以外の要素である文化や環境、あるいは歴史が、審美的省察性の重要な要素となっていることを指摘している。その典型的な語りには、都市と対極としての「地方」への憧憬が融合した審美性が見られる。それは、ウィリアムズとホール（Williams and Hall 2000 : 10）が現代の中間層におけるモビ

6）寮生活を行う島外出身生徒の親代わりとなり、休日に食事を共にしたり、地域行事に共に参加するなど、緊密な人間関係を保つ。

リティとカウンターアーバニズムの価値観を論じる中で「田舎の高級化（rural gentrification）」が生じていると述べるようなノスタルジアが融合したまなざしとも言える。

以上のようなまなざしと省察性を持ち、地方創生の聖地である海士町に来た視察者にとって、その離島に自ら足を運んだという事実は、訪問の大きな意味をなす。政治家が公開している報告書には、地域創生に関する省察のみならず、その地理的隔絶や町民の人間性や地域性への憧憬を含むものが多い。訪問事実が旅の目的をなすことは、これまでも人類学において考察の対象となってきた。たとえばスーザン・スチュワートは絵葉書について、本来は公共的な性格をもった写真の対象物が個人によって私有化された視点の対象へ還元されると述べる（Stewart 1993［1984］；今福 1996 : 73）。すなわち、絵葉書の購入という真正な行為が、文節化された景観が映し出された葉書に文字を書くという行為やそれを送るという行為によって「私的なもの」となり、絵葉書は「場」の個人的専有を宣言するものとなる（今福 1996 : 74-75）。いわば絵葉書は、その旅の目的地に到達したという「証明」であり、それを他者に示すことで快楽を得る一種の自己承認欲望を満たすものともなりえる。

この視点は、近年研究事例が増えているコンテンツツーリズムや聖地巡礼ツーリズムなどの着眼点とも関連性を持つ。土井（2012）はスペイン北西部のサンティアゴ巡礼を考察する中で、巡礼者が徒歩や馬など目的地に到着するまでの過程にこだわり、道中の巡礼者用宿でのスタンプなどの通過記録を記す「クレデンシャル」と呼ばれる巡礼手帳の意味を考察している。また岩崎（2014）は、アイドルを追いかける旅を行うファンの研究を通して、「見たい人」を追いかけること自体が旅の目的となり、観光行動は従来の「ピストン小周遊型」（憧れの対象を見たついでに観光）に公演ごとの移動という時間軸を追加した「サーキット型」となっている点を指摘している。

これらの聖地巡礼やコンテンツツーリズムをめぐる視点をもとに海士町の視察者の現地での実践をとらえると、視察訪問者が現地で写真撮影を行う行為は、まなざしの対象であった海士町に自らが到達したことを示し、訪問した政治家のブログや SNS へのアップロードは地方創生に邁進する自己イメージを確認・発信する行為ともなる。地域創生の成功事例としての「公的な場」としての海士町は、それらの実践を通してついにスチュワートが論じる意味での「個人的占有」の対象となる。また、来訪者にとって、役場職員の名刺も同様の意味を持つことになる。島中の施設で目にした「ないものは、ない」のロゴは、単なるロゴやキャッチフレーズではなく、記号性に満ちている。この記号には海士町の地域創生の取組みと改革意識が意味付与されている。その記号が付された名刺は、自らも地域創生を目指す政治家や自治体関係者、教育改革を目指す教育関係者にとって、巡礼証明のような個人的占有物としての意味を持つこととなる。以上のように視察訪問をめぐるまなざしと省察性には、中央から訪問する視察者と、それを受け入れる地方という二項対立の枠組みが織り成す憧憬のまなざしと省察性が複雑に交錯しているのである。

3.2. 海士町の視察旅行をめぐる社会的相互作用と権力関係

視察旅行は、中心と周縁、都市と地方、あるいは見る者と見られる者、あらゆる意味において、権力関係の落差を伴い、それは人類学的意味における交換関係の不均等にも現れている。P. ブラウ（1974［1964］）は、『交換と権力』において個人レベルのミクロな交換と社会における権力の関係性に着目し、社会的立場の上下関係が、助言などの与えられるものに対する見返りを提供できない際に権力関係の不均等と自発的服従が生じる点を指摘した[7]。このブラウの考察とは文脈が異なるものの、視察旅行の場で訪問者は、語りを当事者から実際に聞くことを期待し、舞台裏を見るこ

7）むろんその恣意性と個人レベルの権力関係をめぐる相互作用の構造を社会のそれと結びつけるブラウの一般化は、メアリー・ダグラスをはじめとする人類学者の批判の対象となっている。その例としてダグラス，M. 2012［1979］『儀礼としての消費』100 頁など。

とを求める。一方の視察される側にとっては、その期待に沿った自己表象と語りを行う必要性が生じる。また、視察者対応は自らの日常業務とは異なる時間と労力を要する。これらの過程において、視察する側はその期待を満たされる一方で、視察される側にとっては、大物政治家の訪問の場合には将来的な政治的見返りの可能性はあるにしても、その場の交換関係の不均等性は明確である。

以上のように、視察旅行には交換関係と権力関係の不均等性が付きまとうが、海士町という視察旅行のコンタクト・ゾーンでは、それとは異なるミクロな社会的相互作用と権力関係をめぐるポリティクスが見られる。以下には、その顕著な事例として「視察旅行の有料化」や「価格決定権」をめぐる語りを取り上げる。

従来、地方自治体が視察を受け入れる際は、行政機関が受け皿となり、職員の業務として無償でアテンドが行われるが、海士町の場合、視察受付は町側が行うものの、その後の調整やアテンドは、海士町観光協会に委託され、有料化されている。来島直後の港でのオリエンテーションや改革の概略説明なども、観光協会スタッフのIターン移住者たちが行っている。視察はゲストのニーズを聞きながら柔軟に設定されるものの、主に「海士町の取組み」と「島前高校魅力化プロジェクト」の2種類が提供され、それぞれ食費や交通費とは別に一人あたり3,000円を支払う必要がある[8)]。

この視察旅行のアウトソーシングの意義として第一に、視察内容の観光資源化が挙げられる。フィールドワークを通して、改革のキーパーソンの間では頻繁に「島外貨」という言葉が使われていた。島外貨とは、海士町への訪問者が島で行う消費による経済効果を意味するわけだが、その文脈を語る中で、メディアでもインタビューを受けることの多いIターン者の男性は次のように述べる。

> 海士町って、他のどの地域よりも実はAmazonの利用率が高いと思うんです…（中略）…そういうのもあってハーン[9)]の発想ともつながるんですけれど、島から逃げるお金を防ぐ、島で落とすお金は、ちゃんと落としてもらう。島でできることは島でやる、それが島にとっても良いことで、ここでお金や産業がまわっていくことになるんですね、…

人口約2,400人の離島において年間200団体の視察団受け入れは、宿泊・飲食業、特産品の売り上げに貢献している主要産業の一つである。「民間にできることは民間に移す」と山内町長自身が述べるとおり[10)]、観光協会による視察受入やレンタカー運営の民間委託など多岐に渡る民営化が行われてきた。同様の発想で、海士町側は視察旅行を資源化し、視察という本来は語りを一方的に収集される行為に、対価としての価値をつけることに成功した。

視察受け入れの有料化は、中央と地方という権力関係の相互作用に変化をもたらすものでもある。海士町にとって、地方交付税交付金や公共事業依存からの脱却を進めてきたが、「中央」は政治・経済双方の意味において無視できるものでない。また、視察はその関係性が最も可視的状況として体現されているものである。海士町は、中央と周縁の関係性で見れば後者の最も外縁部にあたる「過疎」の「離島」であり、中央に対して政治経済的に従属的立場に属する。しかし、その関係性は視察を有料化することで大きな転換を生むこととなる。従来の視察旅行において見る者と見られる者の権力関係の落差を基盤に無償で行われていた行為に対価が設定されることは、贈与交換における互酬性の可視化を意味する。また、視察を計画する団体にとっては、支払わないと視察ができないという状況を意味し、その時点で視察をする側とされる側の権力関係は対等となる。いわばM. セルトー（1987［1980］）が論じる意味での弱

8）2016年11月現地調査に基づく。なお島内案内の場合、交通費として別途3,000円を支払う必要がある。
9）海士町の地域通貨。作家・日本研究家ラフカディオ・ハーンが好んで海士町に滞在したことからハーンと命名。
10）2010年10月山内町長面会。

者の論理としての両義性と柔軟性に満ちた「戦術」を駆使していると言える。

フィールドワークを通して出会う海士町の改革を牽引する立場の方々は、「都会と田舎（の関係性）」「（都市との）つながり」「立場」「島にとって」という言葉を頻繁に使う。例えば中央省庁からの出向で役場に勤めている職員は次のように述べる。

> 田舎が、何で立場が下になるかというと、大都市の論理に従わざるを得ないからです。たとえば（＊会社名＊）みたいな（大きい）会社が島に来て、こちらの在庫を見て「これ全部買うから半額にして」と言えば、それに従うしかない。要は価格決定権がないんです。海士町は、CAS でもそうですが、価格はこちらが決める。これは決定的な違いを生むんです。

同様に I ターン移住者のパイオニアの一人であり、教育魅力化プロジェクトの中心的役割を担ってきた男性は組織間の調整について話す中で次のように語る。

> ウィン－ウィンという言葉は好きではないんです。（それは）都会の論理で、勝ちと負けが前提となっている気がします。僕はハッピー－ハッピーという言葉で考えるんです。両方ともが、ハッピーという…

このような中央と地方の関係性や価格決定権をめぐる語りは、中央と地方の権力関係を、固定的で分断された従属性として両者を見るのではなく、彼らがそれを関連性によってもたらされる動態的なものとして捉えていることを意味する。中央と地方の関係性は、中央を戦術的につなげ、使うことで、島の発展に結び付けることも可能にすることを彼らは熟知している[11]。その意味で、彼らの姿勢と取組みはエージェンシー性に満ちたものと言えよう。

これらの中央と地方の関係性をめぐる語りの文脈は、サイードが対位法的（contrapuntal）思考と論じる視点にも関連する。サイード（1993［1978］）は、西洋／非西洋という二項対立という認識論に基づいて西洋が非西洋に対して停滞・エキゾチックなどの表象の蓄積を行い、それが結果的に権力関係の落差を生み、植民地主義の支配の思考様式としてのオリエンタリズムにつながったと指摘する。そして、「オリエンタリズムから取り残されたもの」として「オリエンタリズムのイデオロギー的侵略に抵抗する歴史」に言及する（Said 1994；太田 1999 : 130）。言説の蓄積が支配の思考様式につながったと論じるサイードにとって、抵抗とは、政治や武力行使をめぐる抵抗ではなく、その言説や言説の蓄積に対する異議申し立てを意味する。その点において、海士町の改革者たちが、中央と地方を二項の分断ではなく対位法的思考、つまり結節点や関連性あるいは相互依存性に着目していることは、一種のブリコラージュ（レヴィ＝ストロース 1976［1962］）的な戦術とも言える。以上の海士町における事例は、視察という場が、視察をする者とされる者が文化的意味で「交渉[12]」する場であり、その場での権力関係は固定的で従属的なものではなく、常にホスト－ゲスト間の文化的な相互作用の動態性の中にあることを示していると言えよう。

4. おわりに

本稿は、島根県隠岐郡海士町を事例に、視察旅行の「場」と「まなざし」の考察および権力関係

11）海士町の地域創生を担っている役場関係者や I ターン者は、中央省庁との折衝や予算申請、プレゼンテーションなど高度な職業スキルと経験を有する。地域創生の取組みに共感する大企業出身の I ターン者の人材を活用している点は、海士町の組織上の大きな特徴でもある。

12）古谷（2001 : 216-218）がグアテマラのインディヘナ文化の芸術において論じているように、交渉（negotiation）には二重の意味を持ち、商品としての市場メカニズムによって決定される価値評価をめぐる交渉と、意味生産の実践の間の相互作用のプロセスという 2 つの意味合いを持ち、文化研究やカルチュラル・スタディーズでは後者の意味合いで論じられてきた。

の相互作用について論じた。海士町は地方創生、特に教育魅力化を中心とした地域活性化の成功事例としてメディアの注目を集めるとともに、政治家や自治体関係者および教育関係者の視察が増加した。それは一種の聖地巡礼でもあり、地域創生のストーリーをもとにしたコンテンツツーリズム的要素さえも見られる。その一方で視察旅行は、見る者と見られる者の関係性と交換関係において不均等が付きまとう。その権力関係の不均等性は、中央と地方というポリティカル・エコノミー論的な従属関係に起因し、視察の現場はそれが具象化されるものでもある。しかし、海士町の事例は、視察の「場」が、そのような一般的見解とは異なり、ミクロな権力関係の転換を伴う相互作用に満ちた場である点を示している。本稿は海士町への視察旅行の訪問者のまなざしには、中心と周縁、近代性（進歩・発展）とそれが取り残されたもの、という一種の地方に対する審美的憧憬を含むまなざしが含まれる点を指摘した。また、視察の舞台をドラマトゥルギー的視点から考察した上で、視察旅行を島外貨獲得の手段とした一連の施策が、単に経済効果を地域にもたらすという目的以上に、中央と地方、見る者と見られる者という二者の権力関係において複雑な動態性の視座を提供している点を示した。視察旅行はツーリズム研究においては研究の蓄積が少ない。今後、本稿が示したまなざしや権力関係をめぐる研究のみならず、ゲスト側の滞在中の日常的実践やホスト側のアイデンティティ・ポリティクスに関する研究など、さらなる研究が必要となるであろう。

引用文献

アーリ，J. 1995［1990］,『観光のまなざし－現代社会におけるレジャーと旅行』（加太宏訳）法政大学出版局.

————. 2004［1995］,『場所を消費する』（吉原直樹・大澤善信監訳）法政大学出版局.

阿部裕志，2013,「地域の誇りを高め、風景を守るオールタータティブ・ツーリズムのありかた」International Conference on Sustainable Conservation and Use of Cultural and Natural Heritage in Japan and China（通訳付学会発表，11 月 26 日　於　香港樹仁大学）.

今福龍太，1996,『クレオール主義』青土社.

岩崎達也，2014,「アイドルのステージを追いかける旅」増淵敏之ほか『コンテンツツーリズム入門』161-179 頁，古今書院.

太田好信，1999,『トランスポジションの思想』世界思想社.

セルトー，M. 1987［1980］,『日常的実践のポイエティーク』（山田登世子訳）国文社.

ダグラス，M. 2012［1979］,『儀礼としての消費』（浅田彰・佐和隆光訳）講談社学術文庫.

土井清美,「サンティアゴ・デ・コンポステラ－変容する巡礼空間」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』20-25 頁，弘文堂.

ブーアスティン，D. 2010［1962］,『幻影の時代－マスコミが製造する事実』（星野郁美・後藤和彦訳）東京創元社.

ブラウ，P. 1974［1964］,『交換と権力』（間場寿一ほか訳）新曜社.

古谷嘉昭，2001,『異種混淆の近代と人類学－ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから』人文書院.

マキャーネル，D. 2012［1976］,『ザ・ツーリスト－高度近代社会の構造分析』学文社.

山内道雄，2007,『離島発生き残るための 10 の戦略』生活人新書.

山中弘，2014,「作られる聖地・蘇る聖地－現代聖地の理解を目指して」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』1-11 頁，弘文堂.

ラッシュ，S. 1991,「再帰性とその分身－構造、美的原理、共同体」ベック，U.，ギデンズ，A.，ラッシュ，S.『再帰的近代化－近現代における政治、伝統、美的原理』（松尾精文ほか訳）205-315 頁．而立書房.

レヴィ＝ストロース，C. 1976［1962］,『野生の思考』（大橋保夫訳）みすず書房.

Cohen, E. 1988, “Anthenticity and Commoditization in Toruism,” *Annals of Tourrism Research* 15 : 371-386.

Nagatomo, J. 2013. “Cultural Practices of Traditional Performing Arts by Lifestyle Migrants in Ama-cho, Oki Islands, Japan : Identity Politics and Cultural Practices of I-Turn Migrants as “Middlemen”,” Kwansei Gakuin University *Journal of International Studies* 5（1）：5-17.

Stewart, S. 1993［1984］. *On Longing : Narratives of the Miniature, the Gigantic, the Souvenir, the Collection.* Durham : Duke University Press.

Williams, A. M., and C. M. Hall. 2000. “Tourism and Migration : New Relationships between Production adn Consumption,” *Tourism Geographies* 2（1）：5-27.